

# ぶどう・被覆栽培

香取農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

香取市栗源地区（香取市栗源ぶどう組合）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 9戸
- (2) 栽培面積 709 a
- (3) 収穫量又は出荷量 1,000kg/10 a
- (4) 出荷先又は販売方法 直売、市場出荷

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	6～12回	13回
化学肥料（窒素分量）	0kg/10a	3kg/10a

## 4 事例のあらまし

香取市のぶどうは、栗源地区の畑作地帯を中心に約9.5haで栽培されており、梨に次いで栽培面積が大きく、地域の代表的な果樹となっています。

生産の中心は旧栗源町を中心とした9戸の農家からなる香取市栗源ぶどう組合で、昭和36年に組織され、40年以上のぶどう栽培の歴史があります。

当組合は、栽培面積の全てが被覆栽培で、以前から露地栽培よりも農薬や化学肥料を低減した栽培に取り組んできました。更に生産履歴を開示することで、より安心な農産物産地としてのイメージアップを目指し、平成18年に‘巨峰’と‘デラウェア’の統一栽培暦を作成し「ちばエコ農業産地」の指定を受け、平成19年産から「ちばエコ農産物」の栽培に取り組んでいます。

## 5 背景・動機

栗源地区のぶどう栽培は、昭和30年代後半に落花生、かんしょ等の畑作物からの転換で始まりました。当地域は、作土が深く降水量も多いなど、ぶどう栽培に適しているとは言えず、当初は露地栽培であったため、病虫害の被害や枝葉の過繁茂により生産が安定せず、生産者は数年で激減しました。しかし、その後、被覆栽培の導入と栽培技術の研鑽により、高品質生産と長期出荷が可能となり、千葉県を代表するぶどう産地となりました。

当組合の特徴は全面積が被覆栽培であり、露地栽培で問題となる病気の発生が少ないことで、殺菌剤の使用回数を抑えてきました。また、直売やぶどう狩りを行っている生産者が多く、消費者の安全安心志向の高まりを受けて、除草剤の削減にも取り組んできました。

しかし、近年市場価格が低迷し、また直売量も伸び悩んでいることから、他産地との差別化を図るため、新たな取り組みが必要と考えられました。そこで、従来取り組んできた農薬や化学肥料を低減した栽培を消費者の目に見える形にし、産地のイメージアップを図るため、平成18年に「ちばエコ農業産地」の指定を受け、「ちばエコ農産物」栽培への取り組みを開始しました。



生育検討会



園内マルチで雑草と湿度上昇を抑える

## 6 栽培方法

### (1) 品 種

巨峰（加温、無加温）、デラウェア（無加温）

### (2) 土づくりおよび施肥

12月に近隣の畜産農家から入手したたい肥を土壤に鋤き込みました。10a当たり‘デラウェア’は1t、‘巨峰’は少なめの0.3tとしました。肥料は食味向上のため有機質肥料を少量施用し、化学合成窒素は使用しませんでした。

### (3) 被 覆

被覆により、べと病、黒とう病、晩腐病を抑えました。

### (4) マルチ被覆

展葉前にハウスの廃ビニールをほ場全面に被覆しました。これによりハウス内の湿度を低く抑え、開花期から幼果期にかけて罹病しやすい灰色かび病を予防しました。透明度の低下した古ビニールを被覆することで雑草の抑制にもなりました。

なお、マルチのため夏季はハウス内が高温になりやすいので、基本的に幼果期を過ぎたら除去しますが、除草の手間を省くため収穫終了後まで被覆する生産者もい

ます。

(5) 病虫害防除

冬期に、病原菌の越冬源となる落葉を集めて焼却処理しました。発芽前の薬剤散布で越冬病虫害の密度を低下させておきました。

薬剤散布は、かけムラがないように散布し、薬剤がかかりにくいハウスの端は手散布で丁寧に行いました。ハダニやアザミウマは被害が拡大してからでは防除が困難となるため、園内をよく観察し、初期防除を心がけました。

(6) 除 草

マルチ被覆の前に1回のみ除草剤を散布しました。生育期間の途中でマルチを除去したハウスでは、収穫終了まで機械除草を行いました。

ア 栽培管理（加温 ‘巨峰’）

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成18年 8月30日
被 覆	平成19年 2月 2日
加温開始	3月10日
マルチ被覆	4月 3日
袋 かけ	6月下旬
収穫開始	8月 1日
収穫終了	8月30日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等（加温 ‘巨峰’）

(10 a 当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
鶏糞・豚糞たい肥	平成18年12月16日	0.3t		
カルミタス	12月16日	40kg		
スーパーシェルカン	12月16日	60kg		
油かす (5.3:2:1)	12月17日	10kg	0.5kg	0kg
骨粉配合 (3.5:20:0)	12月17日	40kg	1.4kg	0kg
メリット赤 (0:10:9)	平成19年 3月29日 4月14日	0.9kg		

(イ) 病虫害・雑草防除等（加温 ‘巨峰’）

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
ベンレートT水和剤20	黒とう病、晩腐病	平成19年 3月 7日
トラサイドA乳剤	ブドウトラカミキリ	3月 7日
ジマンダイセン水和剤	褐斑病、さび病、べと病、黒とう病	3月29日

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
ロディー水和剤	チャノキイロアザミウマ	平成19年 4月14日
パダンSG水溶剤	チャノキイロアザミウマ、フタテンヒメヨコバイ	5月18日
ランマンフロアブル	べと病	5月28日
パダンSG水溶剤	チャノキイロアザミウマ、フタテンヒメヨコバイ	6月 8日
オーソサイド水和剤80	晩腐病、褐斑病、灰色かび病、べと病、枝膨病、黒とう病	注) 6月28日
オルトラン水和剤	チャノキイロアザミウマ、フタテンヒメヨコバイ	6月28日
※ハービー液剤	畑地雑草	3月20日

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

注)「オーソサイド水和剤80」は平成19年11月14日に‘収穫30日前まで’から‘収穫45日前まで’に登録変更

## 7 今後の展望等

被覆栽培のぶどうで最も問題となる病虫害はアザミウマです。被害が拡大してからでは防除が困難な反面、微小であるため発生初期の発見が難しく、予防的な農薬散布が多くなり、農薬の総使用回数の増加に繋がっています。今後、粘着板を利用した発生把握を試験的に実施するなど、効果的なアザミウマの防除方法を検討していきたいと考えています。

香取市栗源ぶどう組合は、販売は個人で行っており、販売先は市場出荷と直売の比率が半々です。今後、消費者や実需者に対して生産履歴の公開と環境にやさしい栽培のPRを積極的に行い、安心して美味しいぶどうの産地として産地イメージの向上を図り、顧客の拡大に繋がっていききたいと考えています。

平成19年の途中から組合員が1名加入し、香取管内でぶどうのちばエコ栽培に取り組む農家は10戸に増えました。被覆栽培であれば、ぶどうのちばエコ栽培は比較的取り組みやすいと考えられることから、今後、他地域への拡大が期待されます。